愛と知と悲しみと

芹沢光治良

新潮文庫

愛と知と悲しみと

高校図書館用

新潮文庫 草72D

昭和五十五年四月一日発行

著者 芹沢光治良

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四一一
振替東京四―八〇八番

装幀 丹阿弥丹波子

印刷・塚田印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社

© Kôjirô Serizawa 1980 Printed in Japan

乱丁・落丁のものは本社にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

愛と知と悲しみと

芹沢光治良著

新 潮 社 版

2081

愛と知と悲しみと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

巴金先生、

先生とお呼びするよりも、親しく兄と呼ばしていただきたいが、失礼になることはなかろうか。

兄が一九六一年の春、東京で開催せられたアジア・アフリカ作家会議に、中国作家代表団の団長として出席せられた折、初めて公にお目にかかったが、会議の終了後、刘白羽副団長とともに、拙宅を訪ねられて、三時間ばかりゆっくりお話をする機会をつくられた。

話下手な僕は、退屈させる非礼を慮って、やむなく私小説的な発想で、中国と僕の関係について打明話をした。実は、会議の開会前に、お国の準備委員をなすっていた楊朔さんに面会を求められた時にも、大体同じような話をしたが、兄も楊朔さんも、感動をもって聴いて下すって、それを小説に書くようにと、熱心にすすめられた。

話のなかで、僕が中国人を初めて識ったのは、フランスの友人ジャック・ルクリュの家であったと告げて、ルクリュの家で会った中国人のことや、ルクリュが北京にのこした娘のことなどを語ったが、兄もルクリュに面識があるばかりでなく、一九二七年にフランスに留学なさって、ルクリュ家に往来したようであるから、若い日にあの家で僕たちは恐らく顔をあわせたことがあるだろうと考えられて、ますます兄に親愛の情をよせた。

兄も楊朔さんも、北京に招待するから、ルクリュの娘にもあい、その上で、創作にかかるようにと、親切な申出をなさった。そればかりでなく、帰国後ただちに、日中文化交流協会を通じて、その夏中国を訪問するように慫慂された。不幸にしてその頃、僕は肺癌の惧れがあって、病床にあり、死を前に苦悩している状態であったから、兄や楊朔さんに感謝したが、同時に、中国訪問が不可能であるから、兄や楊朔さんが熱心にすすめた小説について、真面目に考え、それを完成することが、友情にこたえることであろうと、切実に思った。

あの際お話したように、僕は明治の末年から今日まで生きた僕の世代の人々の一生を、大河小説のように書こうと計画中であるが、兄のすすめる小説は、その長篇小説の別冊ともなり、また、その長篇小説を織布にたとえれば、一つの横縞ともなるものである。しかし、その執筆を、長篇小説の完成後に期したら、或いは筆を染める前に、生を終ることになるかもしれない。そこで、その長篇小説の筆をしばらく休めて、その横縞の作品にかかるのは、兄の友情にむくいるためではあるが、また、意図する長篇小説の創作に関して、多くの暗示や教訓を得られるだろうと、考えるからだ。

それ故、小説のできはどうあれ、巴金兄よ、兄に捧げるよろこびで、僕は病床をはなれるや否や、この小説の筆をとった。しかし、兄が期待したような種類の小説にならないのではなかろうか、ただそれを惧れる。

第一章

ジャック・ルクリュの家が、郊外の並木路にそった古い二階家であったことは、兄も知っていられる。二階家といっても、木造のようで四家族住んでいたから、現在の東京の場末のアパートのように粗末なものだが、ジャック一家はその二階の右側の四部屋を占領していた。

家の前の並木路には、あの頃（一九三〇年前後）、東京の都電そっくりな、古風な郊外電車が走っていた。パリのオルレアン門から四、五十分、停留所から家まで十分以上かかったが、古い鈴懸の街路樹がみごとで、歩くのがたのしかった。一抱えもあって、たかく梢をひろげて、道路の天井のようなアーチをつくり、季節によって、美しく色彩をかえて影をおとしていたが、道路全体に歴史の色が染っていた。

ジャックの家は、鈴懸の梢に屋根もかくれていたが、外壁の色といい、がたぴしした木の階段の具合といい、前の道路と同様に古くて、大革命以前の建物にちがいなかった。その証拠には、便所だが、一米四方ばかりの暗い場所のゆかの真中に、直径十二、三センチの丸い穴があいているだけで、そこから両便をおとすという原始的なもので……そうだ、ジャックの家ではあかりに古風な石油ランプを使ってもいた。

電車が前を通っているのだから、ランプでなしに、電燈をつけることもできたろうが、現に階下の家族は、左も右も電燈をひいていたのに、古風なランプに執着していたのは、パリ人が生活のなかに、新鋭的なものと保守的なものとを双方たくみに採用して、趣味を満足しているのとはちがって、経済的な理由があったのではなかろうか。あの頃、ジャックは貧しそうに見えたものね。

ジャックの祖父、エリゼ・ルクリュは国際的な有名な地理学者で、その著書「地球と人間」は、今でも、人類の発達史では古典になっている。父ポール・ルクリュも同じ地理学者で、ブラッセルやボルドーの大学教授をしていたが、その頃は南仏のドームの屋敷に引退していた。エリゼもポールも、地理学者としてよりも、サン・シモン派の社会主義者、理想的なアナーキストの一家として、全ヨーロッパに有名で、レーニンやクロポトキンはじめ、世界各国の政治亡命者に手をさしのべて庇護したといわれる。日本人のアナーキスト石川三四郎が、秋水事件後、日本から逃亡して庇護をもとめたのも、この一家だった。

僕が渡欧する時、僕たちの結婚の仲人が万朝報の社長で、フランスから帰ったばかりの石川三四郎を紹介したが、亡命前にこのアナーキストは万朝報の記者で、亡命にあたっても社長の援助を受けたという関係で、僕をジャックとその父ポール・ルクリュとに懇切に紹介した。

しかし、彼はルクリュ一家が有名なアナーキストであるとは告げないで、有名な学者一家であるから、フランスへ行ったら気安く世話になるようにと、ただそれだけしか僕に伝えなかったか

ら、僕はジャック一家について知識なしに、フランスへわたった。

ジャックをはじめて訪ねたのは、一九二五年、パリに着いて間もない初夏のことだが、この家の貧しそうな様相に、先ず驚いた。次に驚いたのは、ジャックの他にコルネリッサン夫人と呼ぶ中年の婦人が、主婦代りに、歓迎してくれたが、彼の妻のようにも見えるが、ほんとうはどういう関係であるのか。フレッドと呼ぶ二十三、四歳の青年が、ソルボンヌ大学の地学を卒業して、国際連盟関係の仕事をしているというが、夫人の息子にまちがいなかった。

ジャックは鼻下からあごにかけて、栗色の髯で顔半分をおおっているから、一見老けて見えるが、美しい鼻から目もとなどに、若い年齢がのぞいていて、じみな服装に拘らず、どう見ても、フレッドより十歳は多くなさそうだ。夫人は金髪に碧い目をして、北欧の美人らしい堂々たる体軀をしているが、すでに金髪は色あせて、やはり二十歳以上の息子の母である。それならば、ジャックと夫人が他人かというと、四歳ばかりのピエラという幼女が、夫人を母と呼び、ジャックを父親扱いしている。全く不思議な一家であった。

しかし、間もなく知ったことだが、ピエラはロシアの革命家クロポトキン公爵の孫で、その母親はロンドンで俳優と暮しているが、ジャックとコルネリッサン夫人が、養女として育てていた。ルクリュ一家がヨーロッパの社会主義者や革命家と、同志的な関係にあるから、クロポトキン公爵の孫娘を育てることは、異とすることではなかろうが、それを知ってから、僕はジャック一家に、興味を新しくした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

というのは、僕が東京大学の経済学部に入学した年に、経済学部の機関誌に、新鋭な森戸教授が、クロポトキンの思想に関する論文を発表して、朝憲紊乱罪（びんらんざい）に問われ、社会と大学に大きな波紋をまきおこしたが、そのために、僕たち大学生は禁書になったクロポトキンの自伝などを、たがいにかくして読みあったからだが——

初めてジャックを訪ねた時、妻の晴子は、フランスでピアノの勉強をするつもりで、ピアノの先生について、ジャックに相談したところ、

「私もパリ音楽院のピアノ科を一等賞（プルミエルプリ）で卒業しているから、個人教授はできますが、専門家になるためなら、先生のレビー教授を紹介しましょう」

と、いうので、彼が大ピアニスト、ラザール・レビーの弟子（でし）であることを知ったが、家にピアノもおいてなかった。

晴子は専門家になるのではないから、週に一回ジャックに授業に来てもらうことにしたが、それがジャック一家とますます親しくする契機にもなったが、また、ジャックの私生活もしぜんに僕たちに伝わって来た。

或る日曜日の午後、お茶に招かれて、訪ねたところ、コルネリッサン博士と呼ぶ小柄な中年の外国人が、サロンに招かれていた。赤い髭（ひげ）を鼻下に長くおいて、金髪は禿（は）げあがり、ドイツなまりのフランス語を話したが、オランダの経済学者で、フランスに亡命して、パリで経済学に関する著述をしているということだった。

しかし、奇怪なことには、この経済学者を、フレッドは父（ペール）と呼ぶが、夫人を母（メール）と呼んでいるから、この人が夫人の夫にちがいなかった。しかし、ジャックも、この人と同様に、夫人をリリーと呼びずてにしている。そして、夫人はこの人やジャックやフレッドを等しく呼びずてにするばかりでなく、男同士はまたがいに親しく名を呼びずてにしあっている。夕方僕たちが、お暇（いとま）すると、コルネリッサン博士も夫人やジャックやフレッドに接吻（せっぷん）して、僕たちといっしょに家を辞して、停留所へゆっくり歩いて、パリの独居に帰った――

兄よ、こんなふうに、親友の私生活を書くのは、自然にためらいがちになるが、彼の家でお国、中国（シナ）を初めて知ったばかりでなく、中国と僕との関係は、常にジャックの仲介によったもので、しかも、彼の生活に深い関係があるからだが、その多くの人々がすでに故人になったから、ジャックもゆるしてくれるものと考えて、元気を出して書きつづけるわけだ――

ジャックの両親に、兄はお会いしたろうか。

ポール・ルクリュはあの頃、大学教授を辞（や）めて南仏のドームに隠棲（いんせい）していた。その原因はジャックの母が中風にかかったので、故郷の屋敷――広い小作地が附属していて、小作人などが面倒を見てくれるので、そこで静かに余生を送ろうとしたとか。パリに落着いた翌年の二月の寒い日、僕は突然ジャックの父の訪問をうけた。

初対面であったが、黒服の似合った小柄な上品な老学者は、黒い折鞄のなかから、日本の小学校読本の巻五を取出して、難かしい漢字の読み方や、日本語の意味などを、質問した。その話によると、夫人はベッドにおることが多く、戸外へ出られないから、日本語の勉強をはじめて、日本から小学校読本をとりよせ、独習で三年間に巻五まで進んだとのこと。もちろん老博士も協力するのだが、夫人は日本語を独習することで、新しい世界がひらけることを喜び、そのことが、ベッドに閉じこめられた生活の支柱であるという話で、僕たちにも、休暇の折にドームへ来て、夫人に日本語を教えてもらいたいと、懇ろに依頼した。

しかし、その年は勉強に追われたり、翌年は妻の出産があったり、その次の年は僕の病気というように、毎年休暇がつぶれて、ついにドームを訪ねる機会を逸して、ジャックの母に会えなかった。

この母夫人が実はピアニストで、次男のジャックの音楽的才能を、幼い時から育てようと努力した結果、ジャックはパリの音楽院に入学することになった。ジャックが上京してパリ音楽院に通学するに当り、母夫人はジャックの下宿について心を砕いた末に、家どうし親しい学者のコルネリッサン夫妻が、音楽院から近いモンソー公園横に住んでいたので、母親代りにと、特にコルネリッサン夫人の厚意に、ジャックをゆだねた。

ジャックは、真面目な音楽学生で、気難かしく練習を強いた母親の目から、美しくてピアノの勉強に干渉しない若い夫人の監督に移って、解放感を満喫して、夫人になれ親しんだが、ラザー

ル・レビーのクラスの秀才として人々の嘱望を裏切らなかった。一九一二年に一等賞で卒業して、一四年のシーズンにはパリでデビューすることにして、音楽会場(サル・ガボー)まで予約したが、その夏、第一次世界大戦が勃発(ぼっぱつ)して、演奏会を中止するという不運にあった。翌年五月には、召集令状をうけて、短期間の軍事教練の後、一兵卒として前線へおくられた。一年数か月の苦闘の後、右手に負傷して後方に送還せられた。

これで戦死しないですんだと、家族一同秘(ひそ)かに喜んだが、ジャック自身は、いざ負傷がなおってみると、右手の薬指の骨をぬきとられて、ピアノの演奏が不可能なことがわかり、ピアニストとして屍(しかばね)になったことを知って、絶望におちいった。

兄もジャックと握手して、その骨のない薬指のやわらかな触感を、異様に感じたことがあったのではなかろうか。

休戦になって、絶望しているジャックを励まし、人生を再出発させたのは、コルネリッサン夫人の愛情と献身であった。夫人は若い時に空想社会主義の研究発表をしたことがあり、その研究が機縁で、コルネリッサン博士と結婚したといわれるが、右指を負傷して音楽をすてなければならない彼を鞭撻(べんたつ)して、学問に志させ、さんざん苦労をした末に、ソルボンヌ大学で社会学を勉強させることに成功した。夫人の献身とジャックの感謝とが、代母とその代子のような関係を、知らず知らずに、愛する男と女という関係に移行させたとしても、自然であろう。

ソルボンヌ大学を卒(お)える頃には、ジャック、夫人、コルネリッサン博士の三人は、その三角関

係について、じっくり話しあい、おだやかに解決策を講じようとして、夫人は息子のフレッドをつれて夫のもとをはなれ、あの郊外の古い家に移って、ジャックと同棲することになった——というが、それまでには、第三者にはうかがえない苦悩を重ねたことであろう。しかし、その処置はジャックの母の憤りを買い、夫人は長い親友の信頼を裏切って、若いジャックを誘惑したものと罵倒せられたそうだが、その後、僕にも、コルネリッサン夫人がフランスの婦人のような叡智と良識とを欠くから、ジャックの母が憤るのも当然だと、囁くようなフランス人もあった。

もっとも、僕が郊外の家を訪ねた頃には、家庭的トラブルは静かにおさまって、ジャックはコルネリッサン夫人の夫として落着き、博士や成人した息子とも、たがいに一つの世界をめざす同志として、愛情深くむすばれているように見えた。

ただ、そうした関係が、日本人の僕には、奇異に見えただけだが、それも、この人々が希求している世界を知らなかった、僕の目の不馴れなためにすぎなかったろう。

ルクリュ一家をはじめ、当時のヨーロッパのアナーキストは、人間があらゆる粗野なものと権力とから解放せられて、自由に理知をもってコンミュン（自由都市）をつくろうと願い、同じ思想と希望をいだく者と、同志愛で世界的につながろうと、励んでいた。そして、その運動はロシア革命の成功によって変質され、ブルジョアの空想だったと、色あせたものになったが、しかし、運動の中核のようなルクリュ一家には、まだ光輝がのこっていたのではなかろうか。ジャックの貧しいサロンにも、世界から同志がよく立ちよっていたから——

ジャックは社会学をおさめたが、博士号(ドクトラ)も、教授免許(アグレッジェ)もとらなかったから、教職にもつけなかったが、まだ著書もなく、父や祖父の関係を通じても働く場所がなかったのか、音楽院のレビー教授のピアノの生徒のうち数人に、下稽古(したげいこ)をみていた。

一本の指に骨がなくても、ピアノを教えることはできようが、彼の音楽的才能を、恩師レビー教授が惜しんでのはからいだったと、言われる。それだけに、戦争のために運命を狂わしたジャックの苦衷が察せられる。実際に彼は音楽が好きだった。

当時、フランスは第一次戦争後のインフレの波が荒れていたから、ジャックも一家の経済を支(ささ)えるのに、数人の音楽生の下見をするくらいでは、十分ではなく、収入のある仕事を必死に探(さが)していた。

一九二六年の春頃には、モンマルトルのキャバレで、ドラムを打つ仕事を探しあてたようだ。職場のない時、昔の仲間のなかで、好きな音楽をするのだからと、喜んではいたが、かつてはピアノの天才として将来を嘱望せられたジャックが、フランスのインフレを利用する無作法な異邦の酔客の前で、毎夜ドラムを叩(たた)くとは、どんなに辛(つら)いことだったか。しかも、それが夜の十時近くから朝の四時ごろまでで、終ってから郊外の家へ帰る交通の便がなく、モンマルトル界隈(かいわい)に、小さな部屋を借りなければならないのだから、あまり健康でないジャックの生活は、見るから乱れて不安なものであった。

此为试读，需要完整PDF请访问： www.ertongb